4/14/2016

＊キリスト教学講読Ａ＊＊＊＊

S. Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む

本講読は、キリスト教思想における基礎文献をじっくり読むことを通して、キリスト教思想研究とその方法について学ぶことを目的としている。前期は、キリスト教思想の古典というべきテキストを日本語訳で講読するが、その際に、まとまった分量のテキストから問題（テーマ）を取り出し、必要な調査（文献レベルでの）と分析が行われる。

また、この講読は、キリスト教学専修に所属の学部生の卒論演習を兼ねており、研究発表の機会を設けることが予定されている。

今年度は、シュライアマハーの『宗教論』を取り上げる。

・キリスト教思想をその古典から学ぶことによって、今後キリスト教思想のさまざまな研究テーマに取り組むための基礎力をつけることができる。
・まとまった分量のテキストから自分で問題を見つけ出し、さらにそれに取り組むための方法論を身につけることができる。

Ｂ．テキスト

シュライアマハー『宗教論』には複数の邦訳が存在するが、どの訳を主に使用するかは、授業にて説明する。いずれの訳を使用するにしても、諸邦訳を相互に比較することを行いたい。

Ｃ．成績などについて

・平常点による。（受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。）
・使用するテキストについては、コピーを配布する。
・参考文献：授業中に紹介する。
・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火３・水３）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うことができる。

Ｄ．授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

１．演習参加者の役割

(1)授業前：読み・訳す・分析する　→　問題点・補足事項。
(2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
(3)授業後：残った問題を検討する。

受講者は、それぞれの担当箇所について、テキストを精読し、その要点・概要をまとめ、関連事項について調査、討論すべき問題点の明確化を行った上で（これらを記載したレジメを作成すること）、演習に出席することが望まれる。また、自分の担当箇所以外についても予習を十分に行い、討論に積極的に参加することが必要である。

＜導入＞

Ａ．シュライアマハーの時代

1768：誕生
1783：ヘルンフート兄弟団
1787：ハレ大学
1796：ベルリンの慈善病院シャリテの牧師、ロマン主義者サークル
1799：『宗教論』
1800：『独り思う』
1804：ハレ大学教授
1807：ベルリンへ転居
1809：ベルリンの三位一体教会牧師。
1810：ベルリン大学創立、ベルリン大学教授・初代神学部学部長
1815：ベルリン大学学長
1821/22：『信仰論』
1834：ベルリンで死去

Ｂ．シュライアマハーとはいかなる思想家か

①近代プロテスタント神学の父：啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合
　同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。
②啓蒙思想とロマン主義の総合
　カント・フィヒテ →　　ロマン主義運動 →　　体系構想（神学－哲学）
ヘルンフート兄弟団　　1796　　1811
　ハレ大学神学部（宗教的懐疑）　　ベルリン、ベルリン大学神学部
　1787(19)　　『宗教論』(Reden)・『モノローゲン』
③解釈学・弁証法・倫理学、体系家　→　信仰論（『信仰論』(Glaubenslehre)）の影響
　　Dogmatik から Glaubenslehre へ
　・人間性における宗教　→　弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）
　・実定性　→　個別的で歴史的な諸宗教への定位　　cf.　理神論
　　高次の実在論、説教者
　　↓
　体系的哲学構想（『弁証法』）に裏打ちされた宗教論、方法論としての解釈学の構築

＊『宗教論』（筑摩書房）：宗教を軽蔑する教養人
　第一講　弁明　（宗教批判）
　第二講　宗教の本質について（宗教本質論）
　第三講　宗教へ導くための教育について
　第四講　宗教における集団について、あるいは教会と聖職について
　第五講　さまざまの宗教について（宗教的多元性）

C. ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社。

「フリードリヒ・シュライエルマッハー――近代の薄明の中の神学」（237-285頁）

１．敬虔主義と合理主義の彼方へ

２．近代人として

３．近代人の信仰

４．近代と信仰は両立するか

・人間性の理想、無限の人間性、教養

５．宗教とは何か

・宗教的経験、直接的な観照と感受、心の宗教、無限なものに対する感覚

・世界を超えたもの・超自然的なものへの上昇や超越ではない。（中世・宗教改革）

・世界の背後にあるもの・形而上学的なものへ出てゆくことでもない。（理神論・啓蒙主義）

・予感し、見つめ、感じ取ること。無限者が有限者の中に内在するようになること。

６．「積極的宗教」の意味

・「自然的宗教」批判

・個別的宗教、生きた宗教、具体的宗教

７．キリスト教の本質

・キリストは、「唯一の（einzig）ではないが、しかし無二の（einzigartig）媒介者」

・すべての宗教の中の相対的善

８．近代的な信仰論

９．キリスト――真に人

10．キリスト――真に神？

11．批判的な問い返し

＜参考文献＞

１．シュライエルマッハー『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。

F.D.E.シュライアマハー『キリスト教信仰』の弁証――『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』知泉書館、2015 年。

２．ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』（『ティリッヒ著作集』別巻３）白水社。

３．波多野精一『宗教哲学・宗教哲学序論』『時と永遠』岩波文庫。

４．武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。

５．川島堅二　『Ｆ・シュライアマハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。

６．伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識 ── もうひとつの弁証法』晃洋書房、2013 年。

７．ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち ── パウロからカール・バルトまで』新教出版社、2014 年。